

抑うつ¹⁾の生起に寄与するパーソナリティ特性の性別による相違¹⁾

内 藤 まゆみ

お茶の水女子大学大学院
人間文化研究科木 島 伸 彦²⁾日本障害者雇用促進協会
障害者職業総合センター

北 村 俊 則

国立精神・神経センター
精神保健研究所社会精神保健部

本研究では、抑うつ¹⁾の生起に寄与するパーソナリティ特性が男性と女性で異なるのか検討した。パーソナリティ特性として、Cloninger, Svrakic & Przybeck (1993) のパーソナリティモデルに基づく気質4特性と性格3特性を用いた。抑うつ¹⁾の変化を検討するために2波のパネル調査を行い、パーソナリティ特性、抑うつ¹⁾を1回目の調査で、1回目の調査のあとに経験したネガティブライフイベントと抑うつ¹⁾を2回目の調査で測定した。男女別の階層的重回帰分析を行ったところ、女性ではネガティブライフイベントの頻度を統制した後、高い損害回避が抑うつ¹⁾の変化を生起させることが示された。男性の分析では低い自己志向が抑うつ¹⁾を生じさせる傾向があったが、有意ではなかった。以上の結果から、女性において高い損害回避が抑うつ¹⁾に対する被損傷性となる可能性が示唆された。

キーワード：気質，性格，TCI (Temperament and Character Inventory)，抑うつ¹⁾，性差

問 題

抑うつ¹⁾は生活上の出来事（ライフイベント）を契機として生じることが知られている。これまでの研究でも、ネガティブライフイベントの多さが抑うつ¹⁾を生起させるとの因果関係が確認されている（e.g., Lewinsohn, Hoberman & Rosenbaum, 1988）。しかし、ネガティブライフイベントが抑うつ¹⁾を説明する割合は5～20%であり（Robinson, Garber & Hilsman, 1995）、抑うつ¹⁾の生起を完全に説明することはできない。そこで、ライフイベントに加え、抑うつ¹⁾の生起に寄与する個人の要因、または抑うつ¹⁾に対する被損傷性（vulnerability）に関する研究が行われている。被損傷性はラ

イフイベントのように抑うつ¹⁾生起の十分条件ではなく、それにより必ずしも抑うつ¹⁾が生じると示すものではない。むしろ、被損傷性を示す個人は、そうでない人に比べ、両者が同様にネガティブライフイベントを経験した際に、抑うつ¹⁾が生じることが多いと捉えられる。

パーソナリティ特性は、抑うつ¹⁾の生起に寄与する要因として注目されてきた（e.g., Boyce, Parker, Barnett, Cooney & Smith, 1991）。パーソナリティ特性による抑うつ¹⁾の生起に関する研究では、主に(1)うつ病患者にみられるパーソナリティの特徴と、(2)健常者のパーソナリティを構成する諸特性の2種類に研究の興味は分類される（Barnett & Gotlib, 1988）。(1)は、うつ病患者で顕著に認められる、人との相互作用に対する敏感さと目標の達成などに対する敏感さ、の2つのパーソナリティ特性を指す（e.g., Beck, 1983）。(2)に関す

1) 本研究の一部は、1998年日本社会心理学会第39回大会において発表された。

2) 現在、慶應義塾大学商学部に所属。

る研究では、Eysenck & Eysenck (1985) の「神経症傾向」と「内向性-外向性」が頻繁に使用されてきた。しかし、「神経症傾向」は抑うつではなく、同時に起きている不安と関連しているとの可能性も指摘されており (Barnett & Gotlib, 1988), 抑うつ研究において用いるパーソナリティ特性として適切であるか疑問視される。そこで、本研究では (2) の立場によるパーソナリティ特性が抑うつの生起に寄与するのか検討するために、Cloninger, Svrakic & Przybeck (1993) により提唱されたパーソナリティ理論の気質と性格の7次元モデルを取り上げる。

Cloninger et al. (1993) によれば、パーソナリティは遺伝の影響が大きい先天的な気質 (temperament) と環境の影響が大きい後天的な性格 (character) の相互作用により形成される。気質は、新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執の4特性からなり、それぞれの特性は行動の触発、抑制、維持、固着を示す。性格は自己志向、協調、自己超越の3特性から構成され、それぞれ自己を自律的個人、人類社会、全体としての宇宙にそれぞれ同一化する度合を示す。各特性の詳細な記述は Cloninger et al. (1987, 1993) を参照されたい。7次元モデルにおける気質と性格に関する仮定を検証した研究では、気質は遺伝の影響が、性格では環境の影響がそれぞれ大きいこと (安藤・大野, 1998), 気質が4特性から構成され、それぞれの特性が独立の遺伝的基盤をもつこと (Stallings, Hewitt, Cloninger, Heath & Eaves, 1996) が確認されている。これらの結果に示されているように、7次元モデルの理論的仮定は実証的に支持されつつある。

7次元モデルのパーソナリティ特性と抑うつの関連は先行研究により報告されているが (e.g., Naito, Kijima & Kitamura, in press; Cloninger, Svrakic, Bayon & Przybeck, 1998; Tanaka, Kijima & Kitamura, 1997), その特性により抑うつが生起するとの因果関係の検討は十分になされてい

ない。相関研究では、損害回避と自己志向が抑うつと強く相関し、相関係数の符号から高い損害回避と低い自己志向が高い抑うつ得点と関わることを示されている (Tanaka et al., 1997; Cloninger et al., 1998)。7次元モデルと抑うつの生起を検討した研究では (Naito et al., in press), 自己志向が低いほど抑うつが生起しやすいとの結果が得られており、低い自己志向が抑うつに対する被損傷性と示唆されている。既に述べたように、高い損害回避も低い自己志向と同様に高い抑うつ得点と関わることを示されているにもかかわらず、この研究では、損害回避が高いほど抑うつが生起しやすいとの関係が認められなかった。相関研究では7次元モデルの特性と抑うつを同時に測定しているため、高い損害回避は抑うつの生起に寄与したのではなく、抑うつ時に見られる特徴であるかもしれない。しかしながら、抑うつに対する被損傷性の検討という面から見れば、Naito et al. (in press) の研究にもいくつかの問題が指摘される。

第1に、ネガティブライフイベントを含めた検討を行っていない点である。抑うつに対する被損傷性は、ネガティブライフイベントを契機とした抑うつの生起を、促進する要因と考えられる。7次元モデルの特性をその被損傷性として明確にするためには、被験者が経験したネガティブライフイベントの数を一定とした上で、7次元モデルの特性が抑うつを生起させるのか、検討しなければならない。第2に、性差の検討が行われていない点があげられる。これまでの抑うつに対する被損傷性とパーソナリティに関する研究では性差が報告されている。例えば、パーソナリティ特性とされている機能不全的な態度 (dysfunctional attitude) などの認知的な要因が、男性よりも女性において抑うつの被損傷性となりやすいことが示されている (e.g., Teasdale, 1988)。したがって、男女を合わせた分析では抑うつに対する被損傷性が認められなくても、性別毎に分析すれば、男女いずれか一方に抑うつに対する被損傷性として認め

られる特性が存在するかも知れない。

そこで、本研究では、抑うつに対する被損傷性として、Cloninger et al. (1993) による7次元モデルの特性の中で、抑うつと相関する高い損害回避と低い自己志向を取り上げ、ネガティブライフイベントの頻度を統制した上で、それらの特性が抑うつが生起に寄与するのか、そしてそれらの抑うつに対する被損傷性に性差がみられるのか、男女別に検討する。

方 法

被験者と手続き

東京都内の男女大学生を対象に2回の質問紙調査を実施した。1回目の調査では年齢、性別、7次元モデルの特性、抑うつを測定した。同一の被験者を対象に2回目の調査を行い、1回目の調査の後に起きたライフイベント、抑うつを測定した。抑うつを2回測定するのは、1回目から2回目の調査の間に起きた抑うつの変化をみるためである。抑うつには、長期にわたり持続する特性的な (trait-like) 要素と、変動しやすい状態的な (state-like) 要素が含まれると考えられる (Young, Fogg, Schefner, Fawcett, Akiscal & Maser, 1996)。抑うつを1回測定するだけでは、以前から抑うつ的なのか、それとも、何らかの要因により抑うつが生起したために抑うつを示すのか、明らかにできない。両調査にかけての抑うつの変化には、特性的な要素が含まれず、ネガティブライフイベントやパーソナリティ特性が抑うつの変化をもたらすならば、その要因により抑うつが生起したと考えられる。したがって、2回の調査とも抑うつを測定する必要がある。

1回目に回答した220名(男性105名、女性111名、不明4名)のうち、2回目では169名(男性81名、女性85名、不明3名)の回答が得られた。調査は72～124日間の間隔で行われ、その平均は95.3日、SDは10.0であった。その中から性別の不明な者3名と2回目の抑うつ得点が得られな

かった1名を除き、男性81名女性84名の計165名を分析の対象とした。年齢の平均とSDは、男性は21.2歳、SDが1.5、女性が20.8歳、SDは2.0であった。2回目の調査に回答した165名と回答を得られなかった51名の男女の割合、年齢を比較したところ、2群に差はみられなかった(年齢： $t(214) = -1.55$, *n.s.*, 男女比： $\chi^2(1, 216) = .01$, *n.s.*)。

材料

7次元モデルのパーソナリティ特性 TCI (Temperament and Character Inventory; Cloninger et al., 1993) の日本語版(木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996)を用いた。TCIはパーソナリティの気質と性格の7次元モデルを測定する尺度であり、気質特性の新奇性追求(20項目)、損害回避(20項目)、報酬依存(15項目)、固執(5項目)の4特性、性格特性の自己志向(25項目)、協調(25項目)、自己超越(15項目)の3特性を測定する125項目からなる。各項目は1:あてはまらない～4:あてはまるの4件法で回答された。本研究の標本では、クロンバックの α 係数はそれぞれ、新奇性追求が.73、損害回避が.87、報酬依存が.74、固執が.64、自己志向が.80、協調が.75、自己超越が.86であり、TCIの信頼性を検討したCloninger et al. (1993) や木島ほか(1996)と同程度であった。

ライフイベント Sakamoto & Kambara (1998) による大学生用の尺度を用いて測定した。43個のライフイベントについて、1回目の調査から2回目の調査にかけて経験したかどうか尋ねた。項目に含まれていないライフイベントを経験した場合には、3つまで自由記述してもらった。経験したと答えたライフイベントが、ネガティブ、ポジティブ、どちらでもないのいずれに当てはまるか評定を求めた。ネガティブと評定された個数の合計をネガティブライフイベントの頻度として用いた。

抑うつ 自己記入式抑うつ性尺度 (Self-Rating

Depression Scale: SDS; Zung, 1965) の日本語版 (福田・小林, 1973) を使用した。20項目に対し 1:ほとんどない～4:ほとんどあるの4件法により回答を求めた。最低20点から最高80点の範囲をとり、数値が高いほど抑うつ的であることを示す。クロンバックの α 係数は1回目の得点で .81, 2回目の得点で .77であった。

分析方法

ネガティブライフイベントの頻度を一定にした上で、抑うつを生起させるパーソナリティ特性が性別により相違するのか検討するために、Cohen & Cohen (1983) による階層的重回帰分析を行う。階層的重回帰分析とは、いくつかのステップに分けて重回帰式に1つまたは2つ以上の説明変数を加え、変数群の追加ごとに通常の重回帰分析を実施し、各ステップでの決定係数の変化をみる手法である。説明変数を使用 (=投入) する順序は、理論的な因果性や研究の目的に基づき、あらかじめ決定されている。

分析では、基準変数を2回目の抑うつ得点とする。第1ステップでは年齢を投入し、年齢の影響を統制する。第2ステップで1回目の抑うつ得点をさらに投入することにより、1回目と2回目の抑うつ得点に共通する抑うつの特性的な要素が統制され、両時点にかけての抑うつの変化を検討することができる (Cohen & Cohen, 1983)。以下のステップにおける決定係数の増加は、投入された変数 (群) が、抑うつの変化をどれくらい説明するかを表わす。第3ステップでネガティブライフイベントを投入し、その頻度を統制する。第4ステップで気質特性を、第5ステップで性格特性を投入する。これは、Cloninger et al. (1993) の理論で気質は発達の初期から現われ、性格は後天的に成熟すると仮定されていることによる。気質の4特性や性格の3特性により有意な決定係数の増加が示され、抑うつとの偏相関係数が有意な特性がみられれば、その特性が抑うつの変化を説明し

た、すなわち抑うつを生起させたといえる。抑うつの生起に寄与する7次元モデルの特性に性別による相違があるならば、その特性が抑うつの変化を説明する程度に性差が示されるであろう。

2回目の抑うつ得点から1回目の抑うつ得点を引いた得点を、抑うつの変化として用いることも考えられる。しかし、その得点の差は1回目の抑うつ得点と相関することから、得点の差の分散に、1回目の得点との共分散が含まれていることがわかる。したがって、得点の差では1回目の得点と共通する特性的な要素が統制されておらず、得点の変化を反映したものではないといえる (Cohen & Cohen, 1983)。この理由により、1回目の抑うつ得点で統制された2回目の抑うつ得点の分散を、抑うつの変化の指標として用いた。なお、本研究の分析には SPSS for the Macintosh 4.0 を使用した。

結 果

7次元モデルの各特性、ネガティブライフイベント、抑うつの性差と相関

7次元モデルの各特性、ネガティブライフイベントの頻度、抑うつの平均値を Table 1 に示す。これらの得点の性差について t 検定を行ったところ、女性が男性よりも1回目の抑うつ得点が高い傾向がみられたが ($t(161) = -1.96, p = .05$)、その他のTCIの7特性、ネガティブライフイベントの頻度、2回目の抑うつに性差はみられなかった。

Table 2 に7次元モデルのパーソナリティ特性、ネガティブライフイベントの頻度、1回目と2回目の抑うつ得点間の相関を示す (右上が男性、左下が女性の結果)。男性では、1回目の抑うつ得点と損害回避、固執、自己志向、協調が有意に相関しており、このうち損害回避、固執、自己志向が2回目の抑うつ得点と相関を示した。女性では損害回避と自己志向が1回目の抑うつ得点との相関を示し、損害回避、報酬依存、自己志向が2回目の抑うつ得点と相関していた。男女に共通して

損害回避と自己志向が抑うつとの高い相関を示しており、この2特性と抑うつとの関連の高さが示唆される。ネガティブライフイベントと抑うつとの相関は、女性に比べ、男性はやや低めであった。

抑うつの変化に対する7次元モデルの各特性とライフイベントの影響

多重共線性を避けるために、抑うつ得点と相関を示さなかった新奇性追求と自己超越を除き、分析方法で述べた階層的重回帰

分析を男女別に行った。男性の結果をTable 3に、女性の結果をTable 4に示す。男性では、第4、5ステップで投入した気質特性と性格特性による決定係数の増加はともに有意ではなく（気質： $F(6, 63) = .77, n.s.$; 性格： $F(8, 61) = 1.58, n.s.$ ）、1回目の抑うつ得点を統制した後の2回目の抑うつ得点（抑うつの変化）を説明しなかった。しかし、最終ステップにおける偏相関係数（ pr ）では、低い

Table 1 TCI, ライフイベントの頻度, 抑うつ得点の平均値とSD

	全体平均値 (SD)	男性平均値 (SD)	女性平均値 (SD)
新奇性追求	49.3 (7.4)	49.7 (7.8)	48.9 (6.9)
損害回避	52.4 (10.0)	52.3 (11.2)	52.6 (8.9)
報酬依存	44.0 (6.4)	43.3 (6.7)	44.7 (6.2)
固執	13.0 (2.8)	12.9 (3.0)	13.1 (2.6)
自己志向	67.1 (10.0)	67.4 (10.7)	66.8 (9.4)
協調	71.1 (8.0)	70.6 (8.9)	71.9 (6.9)
自己超越	31.5 (8.3)	30.6 (8.7)	32.3 (8.0)
NLE	2.3 (2.3)	2.1 (2.4)	2.6 (2.1)
SDS 1	41.8 (8.3)	40.6 (7.8)	43.1 (8.5)
SDS 2	42.7 (7.3)	42.1 (7.5)	43.1 (7.1)

NLE : ネガティブライフイベントの頻度

SDS 1 : 1回目に測定された抑うつ SDS 2 : 2回目に測定された抑うつ

自己志向が抑うつの変化を説明する傾向が示された（ $pr = -.21, t(61) = -1.68, p = .10$ ）。女性では、第4ステップの気質特性が抑うつの変化を説明した（ $F(6, 62) = 2.86, p < .05$ ）。3特性のうち損害回避の偏相関係数が有意であり（ $pr = .30, t(60) = 2.47, p < .05$ ）、その符号から高い損害回避が抑うつが生起に関わることが示された。第5ステップの性格特性による決定係数の増加は有意でなかつ

Table 2 パーソナリティ特性, ネガティブライフイベント, 抑うつ間の相関

	新奇性追求	損害回避	報酬依存	固執	自己志向	協調	自己超越	NLE	SDS1	SDS2
新奇性追求	—	-.44**	.18	-.09	.22	-.17	.27*	.21	-.12	-.14
損害回避	-.37**	—	-.09	-.41**	-.56**	-.25*	-.28*	-.13	.57**	.31**
報酬依存	.06	.03	—	.24*	.04	.52**	.22*	.06	-.17	-.17
固執	-.12	.07	.11	—	.27*	.23*	.17	.07	-.29*	-.26*
自己志向	-.11	-.43**	.15	-.27*	—	.20	.09	-.09	-.48**	-.44**
協調	.08	-.20	.57**	.10	.20	—	.12	.05	-.28*	-.19
自己超越	.35**	-.20	.17	.34**	-.32**	.24*	—	.32**	.00	-.09
NLE	.12	.19	.05	.11	-.24*	.15	.24*	—	-.08	.19
SDS 1	.08	.48**	-.21	.21	-.49**	-.18	.00	.23*	—	.49**
SDS 2	.08	.50**	-.24*	.02	-.48**	-.10	-.03	.26*	.65**	—

対角線の上側：男性，下側：女性
SDS 1 : 1回目に測定された抑うつ
* $p < .05$ ** $p < .01$

NLE : ネガティブライフイベントの頻度
SDS 2 : 2回目に測定された抑うつ

Table 3 抑うつの変化に関する階層的重回帰分析(男性)

	決定係数 (R^2)	決定係数の変化 (F 値)	偏相関係数 (pr)
1: 年齢	.00	.23	.08
2: SDS 1	.27	24.51***	.38***
3: NLE	.34	7.00*	.28*
4: 気質特性	.36	.77	
損害回避			-.03
報酬依存			-.09
固執			-.15
5: 性格特性	.40	1.58	
自己志向			-.21+
協調			.07

SDS 1: 1回目の抑うつ得点
 NLE: ネガティブライフイベントの頻度
 偏相関係数は最終ステップの値
 + $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

た ($F(8, 60) = 1.61, n.s.$). 男性と女性で異なる結果を示した損害回避と自己志向について, 偏相関係数の有意差検定 (Cohen & Cohen, 1983) を行った結果, 損害回避の係数において性差の傾向があり ($z = 1.96, p = .05$), 男性より女性の方が損害回避と抑うつの変化の関連が強い傾向が示された. 自己志向の偏相関係数は男女による差は示されなかった ($z = .34, n.s.$). 以上の結果から, 低い自己志向が抑うつの生起に影響する程度に性差はなく, 高い損害回避は女性において抑うつの生起に寄与する可能性が示された.

考 察

本研究の結果から, 抑うつの生起に寄与するパーソナリティ特性に性別による相違があることが示唆された. 7次元モデルの特性のなかで, 高い損害回避が女性において抑うつの悪化を説明し, その偏相関係数に男性と差がある傾向が示された. したがって, 高い損害回避は女性において抑うつを生起させる可能性があるが, 男性においてはその可能性が低いと考えられる. また, Naito et al. (in press) の研究で抑うつの被損傷性

Table 4 抑うつの変化に関する階層的重回帰分析(女性)

	決定係数 (R^2)	決定係数の変化 (F 値)	偏相関係数 (pr)
1: 年齢	.05	3.18+	.01
2: SDS 1	.42	42.84***	.48***
3: NLE	.44	1.67	.12
4: 気質特性	.50	2.86*	
損害回避			.30*
報酬依存			-.18
固執			-.11
5: 性格特性	.53	1.61	
自己志向			-.16
協調			.18

SDS 1: 1回目の抑うつ得点
 NLE: ネガティブライフイベントの頻度
 偏相関係数は最終ステップの値
 + $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

と示された低い自己志向は, 抑うつの変化を説明しなかったが, その程度に性差はなく, 低い自己志向が抑うつの生起に与える影響に性別による相違はないと考えられる.

損害回避が女性の抑うつ変化のみを説明する結果について

本研究で示された性差の傾向, すなわち女性においては高い損害回避が抑うつの生起に寄与するが, 男性では高い損害回避は抑うつの生起に対して影響を与えないのはなぜなのだろうか. この性差が生じた理由として2つの可能性が考えられる. 第1に, 女性では人とのポジティブな相互作用を重要視する人が多い (Beck, 1983) ため, 引っ込み思案や内気などの特徴をもつ高い損害回避を示す女性は, 他者との相互作用がポジティブなものになりやすく, その状況が損害回避の高い女性に対しストレスとして作用するのかもしれない. 一方, 男性は目標の達成などを重要視する (Beck, 1983) ため, 高い損害回避の男性が他者とポジティブな関係を持っていない場合でも, ストレスとして影響しないのかもしれない. 第2

に、男性では高い損害回避が抑うつの特性的な要素に関わるために、抑うつの変化を説明しなかったのかもしれない。1回目の抑うつを統制した2回目の抑うつには、調査間に变化した状態的な要素しか残っておらず、1回目と2回目の抑うつが共通して持つ特性的な要素は除かれている。本研究ではパーソナリティ特性と抑うつの変化、すなわち状態的な要素との因果関係を検討した。男性においては、高い損害回避が特性的な抑うつと関連するために、高い損害回避は有意な値を示さなかったのかもしれない。第1の可能性を検証する際には、損害回避の高低が他者との相互作用と関連すること、損害回避の高い女性ほど人との相互作用の仕方について不満を持っていたりストレスを感じることを明らかにすべきであると考えられる。第2の可能性の検証には、1つの抑うつには特性的な要素に加え状態的な要素も含まれることが想定されるため、2つの抑うつに共通する特性的な要素を抽出し、7次元モデルの特性との関連を調べることが必要であろう。

女性において高い損害回避が抑うつの変化を説明したのは、本研究で調査の対象とした女性では抑うつの変化に対するネガティブライフイベントの影響が小さく ($pr=.12$)、損害回避の説明力が過大に示されたことによる、との指摘がなされるかもしれない。女性のネガティブライフイベントの頻度は1回目の抑うつと関連しており、1回目の抑うつ得点の統制と同時に、ネガティブライフイベントの影響も2回目の抑うつ得点から除かれたため、ネガティブライフイベントの頻度が抑うつの変化を説明しなかったと考えられる。したがって、本研究の結果から、高い損害回避は、女性において抑うつに対する被損傷性になる可能性が示唆される。

自己志向が抑うつの変化を説明しなかった結果について

男女いずれの分析においても性格特性による決

定係数の増加は有意ではなく、自己志向と抑うつの偏相関係数も男性においてのみ傾向を示すにとどまった。これは、本研究の調査間の間隔が約3ヵ月であり、抑うつが変化した程度が小さかったことによるのかもしれない。Lewinsohn et al. (1988) では約8ヵ月の間隔で2波のパネル調査を行っており、1回目と2回目の抑うつの相関が $r=.42$ 、1回目の抑うつで統制される2回目の抑うつの分散が18%と、本研究の抑うつ間の相関(男性: $r=.49$; 女性: $r=.65$)と統制された分散(男性: 27%; 女性: 42%)より低い数値であった。また、階層的重回帰分析に使用した男性と女性の標本数がそれぞれ70と69であり、自己志向の抑うつの変化の説明力が検出されにくかったことも考えられる。したがって、本研究では自己志向が抑うつの変化を説明する程度に性差はないとの結論にとどめ、低い自己志向が抑うつの生起に寄与する要因なのかとの問題については、より調査の間隔を広げ標本数を大きくした検討により明らかにされる必要がある。しかし、女性の高い損害回避は同一の条件にも関わらず有意な結果を示したことから、低い自己志向が抑うつの生起に寄与する程度は、女性における高い損害回避より小さいかもしれない。

7次元モデルは提唱されてからまもないため、その特性が他のパーソナリティ特性や心理的要因と関わりがあるのか明らかになっていない。損害回避と関連する要因が明確にされれば、損害回避の高い女性が抑うつを生起させる可能性の高さについて、上記で述べた可能性以外の新たな説明がなされるかもしれない。今後は、抑うつの生起に寄与する高い損害回避にみられた性差の理由を探るため、本研究で提案した可能性とともに、様々な心理的要因と高い損害回避の関連を検討することが望まれる。

引用文献

- 安藤寿康・大野 裕 1998 双生児法による性格の研究 (1) TCIによる気質と人格の遺伝分析 日本性格心理学会第7回大会発表論文集, 28-29.
- Barnett, P. A., & Gotlib, I. H. 1988 Psychosocial functioning and depression: Distinguishing among antecedents, concomitants, and consequences. *Psychological Bulletin*, **104**, 97-126.
- Beck, A. T. 1983 Cognitive therapy of depression: New perspectives. In P. J. Clayton, & E. Barret (Eds.), *Treatment of depression: Old controversies and new approaches*. New York: Raven Press.
- Boyce, P., Parker, G., Barnett, B., Cooney, M., & Smith, F. 1991 Personality as a vulnerability factor to depression. *British Journal of Psychiatry*, **159**, 106-114.
- Cloninger, C. R. 1987 A systematic method for clinical description and classification of personality variants. A proposal. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 573-588.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. 1993 A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-990.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., Bayon, C., & Przybeck, T. R. 1998 *Measurement of the fundamental states of psychosis and mood disorder as variants of character*. Unpublished manuscript.
- Cohen, J., & Cohen, P. 1983 *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences* (2nd. ed.). Hillsdale: Erlbaum.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, M. W. 1985 *Personality and individual differences: A natural science approach*. New York: Plenum Press.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 1996 Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) 精神科診断学, **7**, 379-399.
- Lewinsohn, P. M., Hoberman, H. M., & Rosenbaum, M. 1988 A prospective study of risk factors for unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **97**, 251-264.
- Naito, M., Kijima, N., & Kitamura, T. in press Temperament and character Inventory (TCI) as predictors of depression among Japanese college students. *Journal of Clinical Psychology*.
- Robinson, N. S., Garber, J., & Hilsman, R. 1995 Cognitions and stress: Direct and moderating effects on depressive versus externalizing symptoms during the junior high school transition. *Journal of Abnormal Psychology*, **104**, 453-463.
- Sakamoto, S., & Kambara, M. 1998 A longitudinal study of the relationship between attributional style, life events, and depression in Japanese undergraduates. *Journal of Social Psychology*, **138**, 229-240.
- Stallings, M. C., Hewitt, J. K., Cloninger, C. R., Heath, A. C., & Eaves, L. J. 1996 Genetic and environmental structure of the Tridimensional Personality Questionnaire: Three or four temperament dimensions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 127-140.
- Tanaka, E., Kijima, N., & Kitamura, T. 1997 Correlations between the Temperament and Character Inventory and the Self-Rating Depression Scale among Japanese students. *Psychological Reports*, **80**, 251-254.
- Teasdale, J. D. 1988 Cognitive vulnerability to persistent depression. *Cognition and Emotion*, **2**, 247-274.
- Young, M., Fogg, L. F., Schefner, W., Fawcett, J., Akiscal, H., & Maser, J. 1996 Stable trait components of hopelessness: Baseline and sensitivity to depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 155-165.
- Zung, W. W. K. 1965 A Self-Rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

— 1998. 10. 27. 受稿, 1999. 5. 19. 受理 —

Mayumi Naito (Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University), Nobuhiko Kijima (Department of Vocational Assessment and Counseling Research, National Institute of Vocational Rehabilitation, Japan Association of Employment of the Disabled) & Toshinori Kitamura (Department of Sociocultural and Environmental Research, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry). *Gender differences in the role of personality traits that affect the onset of depression*. THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 1999, Vol.8 No.1, 23-31.

The purpose of this study was to find out whether personality traits that increase symptoms of depression were common or different for men and women. Four temperament and three character traits based on the model by Clossinger, Svrakic, & Przybeck (1993) were examined. A two-wave panel design was used to examine changes in the symptoms. Personality traits and symptoms of depression were assessed at Time 1; Negative life events after Time 1 and the symptoms again at Time 2. Hierarchical multiple regression of the data for women showed that the trait of high harm avoidance increased the symptoms, controlling for the number of negative life events. The same analysis for men showed that low self-directedness tended to increase symptoms of depression, though, not significantly. These findings indicated that high harm avoidance was a vulnerability factor of depression for women, but not for men.

Key words: temperament, character, Temperament and Character Inventory (TCI), symptoms of depression, gender difference